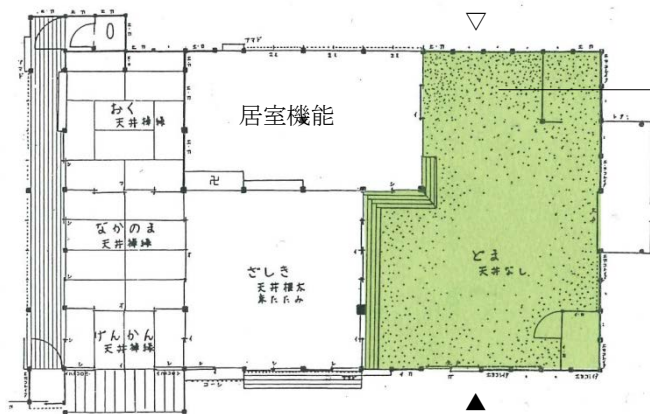


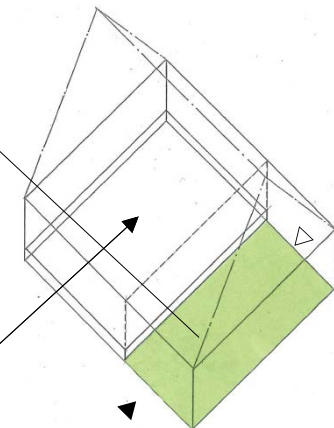
●平入り型民家の例(図1)



土間機能  
(半外部)

居室機能(内部)

リフォームにより  
居室としての快適  
さを確保する部分



●妻入り型民家の例(図2)



区画する境界面は、  
断熱性をもたせる

土間機能  
(半外部)

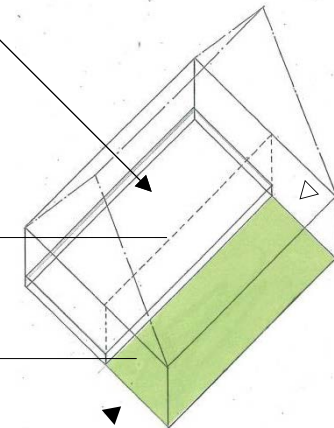


図1：千葉県沼南町の民家例 図2：大阪府能勢町の民家例 共に調査時の間取り図

●コストコントロール

既存の伝統民家の床面積はおよそ50坪前後の平屋建てを中心に、さらに大きい規模の民家もある。また家族構成も生活スタイルも創建された当時とは相違点もある。

千葉県内での市町村別人口密度1000人/k㎡以下は八街市、富里市とつづき、最も低い大多喜町82人/k㎡、長南町は138人/k㎡程度である。また世帯単位の家族構成(人数)を概観すると、世帯数が2000から3000、総人口が6500から8000人の町の神埼町(2.88人)、睦沢町(2.93人)、芝山町(2.85人)、長柄町(2.71人)となり、家族人数が最も低い。また民家調査がなされた白井町(現白井市)では2.7人となっている。各市町村により差異はあるものの、世帯を構成する人数に対して伝統民家の床面積はかなり大きく、日常的に活用されていない部分の比率も高い。

ここには古民家の課題のひとつに、古民家自体の規模がある。快適性を確保するための改修工事費は、規模に比例するのが一般的であるため、所有者は高コストの負担を招く傾向がある。リフォームが部分的または居室単位で限定的に何度も繰り返す背景の一端もあると推察できる。全体的な改修工事ではないため、費用対効果が十分でない点も懸念される。

家族人数が減少した現実的対応として、コストコントロールの基本は、仕様、品質を廉価なものにするのではなく、リフォームの対象となる工事範囲の削減を優先する計画が必要であると考えたい。

建築における減築という考え方は、リフォームにおいても応用し、減・改修の手法について、その考え方と技術的課題を示しておく。

●計画・設計の手法

古民家は、基本的には土間/半屋外空間と座敷/居室空間で成り立ち、改造されつつも現在もその原型を残している。

《2つのブロックに分ける》

内部の「居室系」と半外部の「土間系」の2つのブロック/仕様空間に分けて計画する。「居室系」は床壁天井、建具類、熱環境制御、採光、住宅設備など諸要素を組み込んだ改修内容と予算を確保する。「土間系」は上記計画に生活機能の大半が充足された条件に基づき、不必要となった部分を除去する。但し半外部とは吹き放しのデザインを意味するのではなく、性能的な面を指している。基本となる工事内容は、腐朽部や損傷部位の修理、土間や壁の補修の範囲にとどめ、熱環境制御の断熱や床張り等を避ける。状態により工事費の高低はあるが、居室に比べ、大工手間、材料費、諸経費など、坪単価を低減する。

《居室/土間が接する境界面の仕様》

現住の伝統民家は土間と座敷は「開」の関係が強く、開放系との関係にあり、障子や板戸が組まれているのが一般的である。この関係構造は、生活スタイルと密接な関係から生れた特質ともいえる。ここでは現代のライフスタイルにそってデザインを工夫する必要もあり、その場合の基本的仕様を示す。

- ①境界面は外部に面する部分としての性能をもたせる。
- ②熱環境は土間系と居室系が影響しあう条件に置かれない区画、仕様とする。

《民家の構造上の対応》

土間空間を半屋外とした場合、主な課題として①耐力壁の確保②土台、礎石、足固め等による出入り機能に対する制限③茅屋根が遺存する場合、過度な土間への通風を制御し、茅の劣化に伴う可能な範囲で落下物等を避ける。